

# 水環境国際活動賞（いであ活動賞） （JSWE-IDEA International Activity Award） 授賞に関して

本会では、水環境分野の国際交流・国際協力の促進を目的として、いであ株式会社からのご出捐により、水環境国際招聘賞と水環境国際活動賞を設けております。水環境国際活動賞は本会活動趣旨に沿った優秀な国際的な活動として選定したものを顕彰し、その一部または全部の助成を行う制度です。2022年度は山口大学 山本浩一氏と岐阜大学 鈴木裕識氏が受賞されました。なお、次年度の水環境国際活動賞の募集案内は秋頃に本誌会告に掲載する予定です。

（水環境国際活動賞・招聘賞選考委員会）

## 水環境国際活動賞（いであ活動賞）を受賞して

泥炭堆積物の水環境中動態に関する国際ワークショップ

山口大学大学院創成科学研究科 山本浩一

このたびは栄誉ある水環境国際活動賞（いであ活動賞）を授与いただき、（公社）日本水環境学会ならびに、いであ株式会社の関係各位に心よりお礼申し上げます。

受賞対象となった、「泥炭堆積物の水環境中動態に関する国際ワークショップ」は寒帯と熱帯の泥炭地の研究者の研究交流を通して泥炭堆積物の水環境への流出機構および水環境中での動態に関して理解を深めるために開催するものです。

泥炭は高い有機物含有量によって炭素の貯留源として世界的に注目されています。泥炭は高緯度地方と熱帯や山岳域に存在していますが、地盤としては空隙が大きく脆弱であり、アイルランドや英国では河川流域の泥炭地の地すべりによる泥炭性堆積物の河川への流出が記録では古くからたびたび発生しています。さらに最近ではアイルランドや英国において泥炭地盤上の風力発電所の開発にともなって泥炭地盤の安定が失われ、泥炭地崩壊が発生して泥炭が流動し、ついには河川に流出して下流域の魚介類の死滅など、生態系に悪影響を及ぼしている事例が実際にみられます。

泥炭地崩壊自体および泥炭の水環境への流出自体は新しい現象ではありませんが、近年、インドネシアのスマトラ島に代表される沿岸熱帯泥炭地の海岸では海岸侵食および泥炭地に特有の地すべり現象によって泥炭地崩壊が頻発している地域があり、年間30mの海岸侵食がみられるほか、農地や居住地への被害が現地ではニュース

になっています。このような泥炭地の崩壊によって侵食された泥炭が懸濁物質として海洋に流出することによって沿岸の水質・底質環境が変化する可能性があるほか、沿岸生態系への悪影響が懸念されています。一方で現地では泥炭性物質が再堆積して干潟になるという事象が発見されており、さらに泥炭が堆積してできた干潟がマングローブ林化するためブルーカーボンの獲得という意味でも泥炭の堆積機構の解明が必要となっています。

このような、熱帯泥炭地で発生しているような沿岸における泥炭性堆積物の発生・輸送機構および生態系への影響についてはまだ知見が不足しています。これは泥炭が低密度であり複雑な形状であることも原因ですが、ヨーロッパでは海岸の泥炭地が少ないためにそのような現象がみられないということも世界的に研究が進んでいない原因です。

そこで泥炭堆積物の水環境中での動態に関して英国・アイルランドなど泥炭性堆積物輸送の研究実績のあるヨーロッパの研究者と熱帯泥炭地の研究者を交えて討論を行い、冷帯・熱帯泥炭地における泥炭堆積物の輸送研究を比較する機会を得ることにより、当該分野の研究の発展を促すことを目的として、本ワークショップを企画するものです。着実に準備を進めて2023年度のうちにワークショップを開催し、学会への成果の還元を行いたいと考えています。

# 水環境国際活動賞（いであ活動賞）を受賞して

International Symposium on Microplastics Issues in Water Environment  
(水環境中のマイクロプラスチック問題に関する国際シンポジウム) の開催

岐阜大学工学部社会基盤工学科 鈴木裕 識

この度は、栄誉ある水環境国際活動賞（いであ活動賞）を授与いただき、いであ株式会社ならびに（公社）日本水環境学会の関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

すでに多くの日本水環境学会の皆さまもご存知のように、水環境中のプラスチックごみ、とりわけ、マイクロプラスチックに関する問題意識は世界中で益々高まっています。先日、2023年4月15-16日に開催されたG7札幌（気候・エネルギー・環境大臣会合）では、「2040年までに追加的なプラスチック汚染をゼロにする野心に合意された」との報道がありました。つまり、2019年のG20大阪サミットで採択された「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」の10年前倒しに舵をきったことになり、わが国はその中心的な立場に立っていることとなります。

日本水環境学会においては、2020年度にマイクロプラスチック研究委員会が設置され、1) 水域におけるマイクロプラスチックに関するあらゆる課題について広く研究交流を深めること、2) マイクロプラスチックが社会に対して与える影響について最新の科学情報を提供し、有益な知見を発信することを目的として活動を継続してきています。その活動の一環として、2022年3月には当委員会や日本環境化学会、日本環境毒性学会、日本水産学会が連携して国際ワークショップPlastic pollution in Asian waters - From land to the ocean (PPAW) をオンラインで開催しました。コロナ禍の中ではありましたが、7カ国75名の参加者に恵まれ、大変有意義な議論、情報交換がなされました。また、遠隔地にいるマイクロプラスチック研究者、専門家同士が運営委員となり、交流・連携が深まるとともに、オンラインならではのイベント運営ノウハウの習得にもつながりました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）について、2023年5月以降、感染症法上の位置づけが5類に移行することになり、今後の国内外のイベント開催方法もまた多様化していくものと思われれます。今回計画する、International Symposium on Microplastics Issues in Water Environment（水環境中のマイクロプラスチック

問題に関する国際シンポジウム）では、前回イベント以降に、多くの研究成果が生まれてきている状況に鑑み、各国専門家間のさらなる発展的なディスカッションと情報共有の実現を目指します。With コロナにおいて会場を確保して対面式での口頭発表やポスター発表を行うだけでなく、来日できない海外研究者向けにはオンライン参加可能な、ハイブリッド形式による国際シンポジウムを計画します。マイクロプラスチック研究委員会メンバーに加え、マレーシアのマングローブにおけるプラスチック汚染に関する研究を展開している科研費プロジェクトの研究メンバー等の幅広い運営委員の体制下で、マイクロプラスチックにご関心のある日本水環境学会会員やアジアにおけるプラスチック汚染に関する研究を実施している方々へ、国際シンポジウムへの参加や研究成果発表の機会を提供できればと考えております。また、前回イベントと同様に、若手研究者を対象とした表彰も実施予定です。

話を「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」に戻しますが、追加的な汚染をゼロにすることが目指されている「海洋プラスチックごみ」は、レジンベレット、タイヤ粉塵、繊維くず、塗料片等の「素材」、「形」が様々な上に、マイクロプラスチックなどの「サイズ」も多様なものを対象にしているわけですから、一言に「削減」と言っても一筋縄にはいかないのは当然です。

今回のイベントにより、これらの多様なプラスチック問題に対し、「分析法の開発、改善」、「環境存在実態の把握」、「毒性・影響の評価」等の多面的な分野から国内外の多くの研究者から最新の研究発表を世界へ発信いただくとともに、関心のある専門家やステークホルダー、国や地方自治体からの参加者も募ることで、「発生抑制」、「流出防止」、「代替素材への転換」等につながるような新たな交流とネットワーク構築のきっかけになれば嬉しい限りです。そのために、シンポジウムの準備をしっかりと進めてまいります。この度は、誠にありがとうございました。